慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	未来表現をめぐって
Sub Title	Le verbe aller et le futur : comparaisons dans quelques emplois
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2007
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.92, (2007. 6) ,p.186(109)- 202(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00920001-0202

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

未来表現をめぐって

川口　順二

0. はじめに

川口（2007）は「行く」を意味するフランス語の動詞 aller がモーダルな基盤を持つという主張をした．これは詳細な検証を俟って具体化すべき記述のプログラムである*.

〈aller + 不定詞〉（以下 aller + inf.と略す）の構文には「近接未来」を指すという重要な用法がある．ところがフランス語には始めから存在する未来形があり，これについて伝統文法は時間的位置づけを行なう時制的用法に加えてモーダルな用法を認めてきた．

本稿では未来への言及に用いられるこの2つの表現形式のうち，直接に未来時を指示する用法を除いて他の用法について状況を把握する手がかりを求めたいと思う．両者は多くの研究者が時制としての用法の比較を行なってきたが，それ以外の用法についてはまだ十分に解明されてはいない．そこで基本的なデータベース作成が望まれる．本稿はそのための覚書である．

Aller + inf.も未来形も時制的用法以外にさまざまな用法があり，aller + inf.については既にそのリスト作りを開始している．他方未来形については多くの研究があるのでそれを援用しながら観察を進めていくことにする．まず第1節で両者の歴史的由来に簡単に言及した後で，第2節で前稿であげた用法のうち，「特徴的ふるまい」を表わす用法，第3節では時制の特殊用法と見なされる未来の状況の位置づけの用法，第4節では「緩和」機能を持つとされる未来形の用法を，そして第5節ではこれも前稿で話題にした「異常な行動」を示す aller + inf.を観察する[1].

1. 未来形と aller + inf.

先に見たようにフランス語では未来への位置づけの形式として未来形(*vous ferez*)と動詞 aller「行く」＋不定詞（*Vous allez faire*）が挙げられる．

英語やドイツ語の未来表現形式（shall / will + inf. ; werden + inf.等）は未来の状況[2]に言及する形式であるわけだが，実際には用法にずれがあり，「未来」という概念が言語によって異なるものであることが認められる．これらの差異を無視することで類型論的知見が得られるが，他方それぞれの言語が未来をどのように概念化するのかを特定することも重要であろう．

文法化研究では COME TO, COPULA, DEONTIC MODALITY, GO TO, LOVE, OBLIGATION, H-POSSESSIVE, TAKE, THEN, TOMORROW, VENTIVE, WANT などの概念を示す語が未来形に到着する文法化の出発点として挙げられている[3]．フランス語の動詞未来形は俗ラテン語の〈動詞不定詞＋ *habere* (> fr. *avoir*) 現在形〉に由来するものだし，英語助動詞の will や shall も WANT や OBLIGATION から派生している．ドイツ語では werden + inf.が未来形と呼ばれるが[4]，これは TURN, BECOME という意味要素から来ている．また aller + inf.と be going to + inf.は GO TO の典型例である．これらの現象は他の言語でもしばしば観察されることであり，自然言語が意味変化や文法要素生成においてある程度の規則性を示すことが知られる．

しかしながら例えばフランス語の未来形を含む文の英語やドイツ語への翻訳を見ると，ターゲット言語において未来形が現れないことも多いのである．これに加えて日本語のように未来の表現形態が動詞レヴェルでの活用形として存在しない言語もあるという事実は，未来の概念を相対化することを促すであろう．

2.「特徴的ふるまい」

Aller + inf.の用法の 1 つとして「特徴的ふるまい」を示すものがある．Larreya(2005)の例を引用しよう[5]．

(1) Il [= George Bush] dit tout et n'importe quoi. Un jour, il dit qu'il faut faire la guerre parce que Saddam Hussein a des armes de destruction massive, un jour il dit que Saddam Hussein soutient le terrorisme international, et un autre jour il va expliquer qu'il faut installer en Irak un régime démocratique qui sera un modèle pour tout le Moyen-Orient. (France Inter, 12/3/03, apud Larreya(2005)) [ブッシュの言うことは一貫性がない．ある時はサダム・フセインが大量破壊兵器を持っているから戦争しなければならないと言い，[...]ある時は中近東全体のモデルになるべき民主政体をイラクに打ち立てなければならないと説明する]

これに平行して，未来形に次のような用法がある．

(2) Cette situation privilégiée entraîne quelques servitudes : le linguiste verra souvent des chercheurs relevant de disciplines voisines, mais différentes, s'inspirer de son exemple et tenter de suivre sa voie. (C. Levi-Strauss, apud Celle(1997) : 109) [言語学者は他の隣接科学に携わる学者たちが言語学の方法を援用しその方法を用いようとするのにしばしば気づくだろう（ことになる）]

他の学者たちが言語学的手法を取り入れる状況を言語学者が知ることになるだろうとする文であり，言語学の特性に拠ることでこのようなことが予測可能な状況を示すと考えられ[6]，その点で aller + inf. と類似性がある．

他方英語 will にも類似する用法がある．Celle は(2)の英訳を挙げている[7]：

(3) This privileged position carries with it several obligations. The linguist will often find scientists from related but different disciplines drawing inspiration from his example and trying to follow his lead. (英訳 C. Jacobson & B. Grundfest, *loc.cit.*)

3. 過去の状況の前望的提示

未来を表わす形式が過去の状況を示すというのは一見矛盾しているようだが，過去のある時点に視点を置いて，それよりも後に起こった出来事を示す形式で，これに対応する未来形の用法は前望的未来とか歴史的未来と

呼ばれる．次の例を見てみよう．

(4) Après Honoré, trois autres enfants naîtront : 1° Laure (1800-1871), qui épousera en 1820 Eugène Surville, ingénieur des Ponts et Chaussées ; 2° Laurence (1802-1825), devenue en 1821 Mme de Montzaigle ; c'est sur son acte de baptême que la particule « de » apparaît pour la première fois devant le nom de Balzac. Elle mourra dans la misère, honnie sans raison par sa mère ; 3° Henry (1807-1858), fils adultérin dont le père était Jean de Margonne (1780-1858), châtelain de Saché. (P. Berthier, Vie d'Honoré de Balzac, dans son édition du Colonel Chabert : 172) [Honoré の後 3 人の子供が生まれる．1）Laure(1800-1871)，彼女は 1820 年に E.Uurville と結婚する（ことになる）．2）L. (1802-1825)．1821 年に Montzaigle 夫人となった．[...]彼女は母親から理不尽に排斥され，貧困の中に死ぬ（ことになる）[...]]

これはバルザックの小説 Le colonel Chabert につけられた Barbéris の前書きからの抜粋で，小説家の家庭に生まれた他の 3 人の子供たちの紹介である．まず既に述べられた Honoré の生誕に読者の視点が位置づけられ，それに後続する子供たちの出生を動詞 naître「生まれる」の未来形が示す．次いで 1 人目の Laure の 1820 年の結婚，2 人目の Laurence の 1825 年の貧困の中での死が未来形で言及される．ただし Laurence の洗礼証書で始めて貴族を示す de が Balzac という姓の前につけられたことへの言及では apparaître「現れる」という動詞が現在形に置かれているが，これは歴史的現在である．次いで 3 人目の Henri については父親が Jean de Margonne という人物であることが提示されるが，ここで父親の紹介は be 動詞にあたる être の半過去形 était が用いられている．

ここでの問題は，①未来形がどのようにして過去の出来事を示せるのか，そして②なぜそのような使い方がされるのか，の 2 点であろう．

ここで Renchenbach の表記を使って，状況の時点を E，発話時点を S，そして状況を位置づける基準時点を R としよう．1 つ目の点については，読者の視点が(4)では小説家の生誕時 R におかれ，その時点から後に起こる状況

を見ているのだという従来の説明が有効である．ここでSが現れないのは，書かれたテクストにおいて発話者と共に発話原点を構成する共発話者がテクストが構築された時点では不在であるためである．発話者のテクスト構築時点よりも読者がテクストを読む時点が発話の擬似原点となる．

しかしこれは会話に現れる最も典型的な未来時への言及をS = R > Eと表記するとして，歴史的未来はこの談話における普通の用法において視点を発話時から過去の出来事の時点E'に移すだけで得られる用法なのだろうか．これが上記②の問である．まず①の問題から手をつけよう．

フランス語の未来形は青木（1998）の言うように，状況が未来に起こるか否かという存在に関わる用法と，存在の措定されている状況についてその時間的位置づけに関わる用法とが考えられる．この考えに基づいて(4)を読み直してみよう．小説家の次に生まれる長女の結婚は筆者の確実に持つ知識であり，その位置づけはここでは生起の年を述べることで行なわれる．また，子供たちについては最初に3人生まれることが述べられていて状況の存在はnaîtrontで既に導入されている．そこでその後のテクストでそれぞれの名前を読み上げることと，その生誕年（と死亡年）を示すことで時間的位置づけが行なわれていると考えられる．

状況の提示の仕方には多様で，様々な構文が考えられる．次の例は直接に日付を提示することによる状況の位置づけではなく，文脈に現れた時点に対して定位されている．

(5) Durant cette période, Balzac ne se contente pas d'assurer le développement de son oeuvre : il se préoccupe de lui assurer une organisation d'ensemble, comme en témoignaient déjà les *Scène de la vie privée et les Romans et contes philosophiques*. Maintenant il s'avance sur la voie qui le <u>conduira</u> à la conception globale de *La Comédie humaine*. (P. Berthier, Vie d'Honoré de Balzac, dans son édition du *Colonel Chabert* : 177) [...]] かくて彼は人間喜劇の全体的コンセプトに<u>至る（ことになる）</u>道を進んでいく]

〈S'avancer sur la voie + 修飾表現〉は成句であり，「修飾表現」と記した部分には様々な構文要素が来るが，要はvoie「道」を修飾してどのような状

況が目指されているのかを特定する要素であれば良いということである．人間喜劇の構想と実現は既知情報であるので，(5)は存在を提示するのではなく時間軸上への位置づけという機能を持つ．未来形を含む文の冒頭にある maintenant「今」は先行文脈にある「作品群に全体的構成を与えること」という状況の時点に言及しているのであって，そこに至る準備段階として他の作品群がすでにその前兆となっていたことが témoigner「証拠となっている」の半過去形で示されている．未来形に置かれた状況はこの maintenant によって時間的な位置づけの対象になっていると考えられる．

次の例はどうであろうか．

(6) Premières publications en librairie : *Le Curé de Village*, 1841 ; *Mémoires de deux jeunes mariées*, [...] *La Femme de trente ans* (sous sa forme et son titre définitifs après beaucoup d'avatars), *Les Deux Frères* (titre qui deviendra *La* Rabouilleuse), 1842 ; (P. Berthier, Vie d'Honoré de Balzac, dans son édition du *Colonel Chabert* : 182) [[...]このタイトルは（後に）ラ・ラブイユーズとなる[...]]

この例では作品の最初のタイトルに続いて付加情報として変更後の新しいタイトルがカッコに入れられた同格の名詞句で示されている．時間関係については全く問題がなく，Les Deux Frères と題された作品の出版を基準時として，そこから見て時間的に後に位置するタイトルの変更という状況を未来形で示している．この関係節内の未来形は状況の存在を提示する機能を持つと考えられる．では次の例はどうだろうか．

(7) Christophe Colomb

Un Gênois

C'est un Génois, c'est le fils d'un tisserand. Lorsqu'en 1498 il prendra ses premières dispositions pour sa succession, il se dira lui-même natif de Gênes, et c'est à sa ville d'origine qu'il réservera une notable partie des bonnes oeuvres que lui permettra sa fortune. Sa famille *est*-elle originaire de Galice, de Corse ? S'*agit*-il de Juifs émigrés de Catalogne ? Aucune preuve sérieuse n'en a jamais été apportée.

Lorsqu'il sera établi dans la péninsule Ibérique, il parlera couramment le castillan, et c'est en cette langue qu'il écrira. Même dans les lettres à ses frères, même dans les notes rédigées à son propre usage, il n'utilisera pas la langue italienne, ou plutôt le dialecte génois qui *est* certainement la langue normale de son milieu professionnel d'artisans, puis de marchands, jusqu'au moment où, à vingt-huit ou trente ans, il quitte l'Italie. A partir de 1481, on a de lui une centaine de textes authentiques. Deux brefs passages mis à part, tous sont en castillan. (Jean Favier, *Les grandes découvertes d'Alexandre à Magellan*, Paris, Fayard, 1991 : 439) [[...]1498年に遺産手続きをとるとき，彼は自分をジェノヴァの生まれだと言っている．そして彼の資産が許す慈善活動の多くを自分の故郷の町にあてる．[...]イベリア半島に落ち着くと，彼はカスティリア語を流暢に話すし，書くのもこの言語である．兄弟への手紙も，また自分のための覚書の中でさえもイタリア語しか使うことはない（だろう）[8]．いやむしろジェノヴァ方言というべきだろう．この方言は彼の生きた職人の世界では間違いなく最も普通の使用言語だったし，その後彼が25才が30才でイタリアを離れるころまでには商人の言葉にもなっていた．[...]]

この例は歴史的現在と歴史的未来という2つの時制を活用し，また現在形にはこの他にイタリック体で示した超時間的事実を示すものもあり，加えてAucune preuve sérieuse n'en a jamais été apportée という文はテクストの著者の発話時点（これは読者のそれとほぼ同じという前提を持つが，現実には長い期間が両者を分けている可能性もある）における完了態を表わす．

ところで歴史的未来の用法についてはもう1つの，先に②と名づけた問題があった．すなわち，何故この時制を用いるのかという問いである．Riegel et al.(1994)はこの歴史的未来について生徒・学生たちによる多用・濫用を確認している[9]．歴史的未来は語りの現在と区別のつきにくい歴史的現在と異なり，その出現がテクストのジャンルを一義的に特定するほどの性質を有しているのであって，口頭による自然な語り口調では現れることが無い．だからこそ真似やすい時制なのであろう．

しかしながらこのことは歴史的未来の用法の解明には未だに不十分である．Celle(1997)は次のような示唆をしている．すなわち，状況の生起時点をEと置くと，Eより以前の時点に視点Rをおいてそこから E を位置づけるという説明に加えて，発話時点Sからも同時にEの位置づけを行なっている，という考え方である．そして彼女は歴史的未来に評価的価値を認める．

未来形が発話時点に対して断絶 rupture の関係を持つという Benveniste に根ざす考え方は発話を考慮に入れる時制論では比較的安定したコンセンサスを得ている．Aller + inf.が現在の近傍に位置づけられる状況の表現に用いられるのと対比的に，未来形は全く異なる関係を発話時と持つことになる[10]．

Celle は未来形の発話状況原点に対する時間的断絶関係が歴史的未来に特有の評価的価値を生みだすとする．その際特徴的なのが先行する一連の状況を総括するアセスメント bilan 機能を示す用法だとする．彼女の例を見てみよう．

(8) L'opposition de la Communauté européenne, d'une partie de l'armée française, et les querelles de factions au sein du FLN agirent dans un même sens : la résiliation des accords d'Evian. Aussi, lorsque Krim Belkacem voulut, en juin 1962, s'appuyer sur la lettre de ces accords pour se maintenir au pouvoir contre l'alliance de l'état major de l'Armée de libération nationale (ALN) et de Ben Bella, il <u>échouera</u> dans sa tentative. Le Général de Gaulle refusa d'entraîner la France dans un nouveau guêpier. (*apud* Celle(1997) : 181) ［[...]彼は企てに失敗<u>する（ことになる）</u> [...]］

歴史的未来に置かれた状況は時間的には発話時Sから断絶した状況時Eを持つわけだが，発話者はこの状況を引き受けて発話するとされる．(8)における Il échouera「彼は企てに失敗することになるのだった」は確かに先行する情報の到達点でありテクスト全体の中で重要な要素である[11]．

Celle の仮説は魅力的であるが，しかし実際のテクストでこれが確認できるだろうか．多くの文法家たちは歴史的未来がある程度のテクストスパン

で連続的に用いられる現象を指摘している．また先に生徒・学生によるこの未来の濫用の指摘を見たが，このこと自体が未来形の連続使用の現実を示唆している．例文(7)もこの考えを支持している．従って歴史的未来の価値については未だ確定されてはいないと考えよう[12]．

さて，歴史的未来に類似する用法は英語の will にもあり，これはフランス語よりも広く用いられるとされる．またフランス語の aller + inf.にも並行する用法が確認される．

(9) Le comte Hanska était mort le 10 novembre 1841, en Ukraine ; mais Balzac recevra le 5 janvier 1842 seulement l'annonce de l'événement. Mme Hanska, libre désormais de l'épouser, va néanmoins le faire attendre plus de huit ans encore, soit qu'elle manque d'empressement, soit que réellement le régime tsariste se dispose à confisquer ses biens, qui sont considérables, si elle s'unit à un étranger. (P. Berthier, Vie d'Honoré de Balzac, dans son édition du *Colonel Chabert* : 183) ［ハンスカ伯爵は 1841 年 11 月 110 日にウクライナで没するが，バルザックがその死の知らせを受けるのは 1842 年 1 月でしかない．彼との結婚が可能になったハンスカ夫人はしかし[...]あと 8 年間彼を待たせる（ことになる）］

最初の文ではハンスカ夫人の夫の死が述べられ，大過去が日付の指定と共に用いられて基準点が設定される．次に延べられるのはバルザックが訃報を受け取ったことだがそれが 2 か月近くも経った後のことであることが強調される．この文は未来形によって最初の状況とは時間的な断絶関係におかれるが，ここでも日付の指定なしには非文となる．このように始めの 2 つの文は日付の指定によって状況が位置づけられている．3 つ目の文ではテーマがバルザックからハンスカ夫人に移り，aller + inf.が彼女のその後の 8 年間の状態を記述する．Aller + inf.は基本的な特徴として，述べる状況がその依拠する基準時点においてすでに成立しているか，または成立準備が整っていることを示すが，この特徴は遵守されていて，ハンスカ夫人がバルザックを待たせるのはバルザックがハンスカ伯爵の死を知ったときからであり，従って 1850 年 3 月 14 日の結婚まで 8 年間が経過する．

未来形と aller + inf.は発話時点から見た未来の状況への言及において差異があるが，歴史的用法にもこれと類似した差異が観察されることになる．

4.「緩和」

Imbs(1960)は未来形のモーダルな用法の1つとして次のような例を挙げている．

(10) Je ne vous cacherai pas que je ne suis guère satisfait (loc.cit. : 52)［余り良いと思っていないことをあなたに隠すつもりはありません］

満足していないということを相手に「隠すことはしまい」と未来形で言いながらも，そう表現することで実際には隠さずに言ってしまっている．Imbs は未来形が発話時と動詞の示す状況との間に時間的ずれの存在を想定するものだが，この時間的ずれの代わりに話し手が自分の考えとその言語表現との間に心理的ずれを置く用法だと規定する．同じ範疇に属する用法として次の例も挙げられている．

(11) Je vous demanderai de vous taire un peu.［ちょっと黙るようにお願いします］

(12) (dans le style commercial :) Cela fera 100 francs pour Madame.［奥さんは100フランです（になります）］

(13) (id.) -Ce sera tout, Madame ?［これで全部ですか，奥さん］
--Ça ira comme cela ? (ibid. : 53)［これでよいですか］

この緩和用法を「丁寧さに基づく緩和」とした Imbs は，この他に「慎重さに基づく緩和」((14), (15)) と，「推測」((16)) を挙げている．

(14) Ce futur, nous l'appellerons, si vous voulez bien, futur d'atténuation prudente.［皆さんよろしければ，この未来を慎重さに基づく未来と呼ぶことにします］

(15) Sortant du collège, je l'avouerai à ma honte, j'avais perdu quelque temps à étudier les sciences occultes.［恥ずかしいのですが，学校を出た後神秘学に時間を費やしたということを告白します］

(16) Pourquoi donc a-t-on sonné la cloche des morts ? Ah ! mon Dieu ce sera pour

Madame Rousseau. [なぜ死者の鐘を突いているのかしら．あらあら，きっとR夫人のためだわ]

単純未来形の推測用法は現在ごく稀なものになっているが，慎重さによる緩和は書き言葉で一般である．

Confais(1990)はこの緩和効果についてもImbsの解釈を否定する．例えば(14)は典型的に講演に現れる用法だが，「もし皆さんよろしければ」は単なるレトリックであり，発話の内容から見て慎重さはむしろ不要なはずだと言う．この考えを支持する例としてConfais(: 287)は次の例を出す．

(17) Je vous répondrai que... Je vous ferai remarquer que... (ibid. : 287) [(その質問に対しては）次のように答えます（／たいと思います)．(このことについては）次のような点に注意していただきます（たいと思います)]

講演やディベートでよく聞かれる表現だが，これはアカデミックな文脈での定型表現とも言える．1つ目の文は質問の不備を衝くときによく用いられることもあるので，丁寧さを言うならば排除されるべきものでさえあろう．(17)は(10)-(13)と同じ用法であるので，結果としてImbsが緩和と呼んだものは用法の一部に過ぎず，全体としては緩和は二次的な意味効果に過ぎないことになる．Confais自身は2つの未来表現を主観性・客観性というレヴェルに位置づけて，aller + inf.は状況を客観的に捉えた表現，未来形は主観的に捉えた表現と解釈する．彼は次のような例文に基づいてこの仮説を提示している．

(18a) Paul va se marier.

(18b) Paul se mariera.

Aller + inf.を用いる(18a)は発話者が客観的な手がかりか第3者からの情報に基づいて言うものであり[13]，発話者の主観性とは切り離されたものだという．それに対して未来形を使う(18b)は発話者の直感のみに基づく発話であり，それ以外の根拠がないような提示の仕方だとされる．Confaisはこの主観的性質が未来形の文において語用論的に行為を志向する主体の意図を示す傾向に繋がると考えているようである．

ところで「緩和」の概念は，川口（2007）で見た「婉曲」用法を思い起こさせる．近年頻度が高くなっていると言われるが，ただしこれは次の例のように不定詞が dire に限られた用法である．従って本節の未来形の例と同列に扱うことは避けるべきであろう．

(19) **Chaud ou froid** : Je sais pas ce que je prefere, les deux sont desagreables quand c'est trop ! On va dire froid, ca donne une excuse pour se serrer contre les gars[14] (http://www.wanagro.com/blog/entry.php?u=kroquemitaine&e_id=2851)（アクセントなどは原文で省略）

5.「異常な行為」

川口（2007）で aller + inf.の用法の 1 つとして「異常な行為」に言及した．これは未来の状況への言及とは異なる用法と思われるが，この考察は aller + inf.の特性を考える上で有用であろう．これは次のような例がある．

(20a)（双子の子供についての両親の会話）

-- [...] On ne sait jamais ce qu'ils peuvent penser. Ils sont trop avancés pour leur âge. Ils savent trop de choses.

--Tu ne vas tout de même pas leur reprocher leur intelligence ?

Notre Mère rit.

--Ce n'est pas drôle. Pourquoi ris-tu ? (A. Kristof, *Le grand cahier* : 26-7)

[あなた，あの子たちが頭が良いということに文句を言おうとするんじゃないでしょうね] [15]

この例の英訳は次の通りである．

(20b) -You're not going to reproach them with their intelligence, I hope ? (: 23)

つまり，異常な行為の allr + inf.はそのまま be going to + inf.で英訳されるのである．同様の例を他のテクストから 2 つ挙げておこう．

(21a) VLADIMIR Mais tu ne peux pas aller pieds nus.

ESTRAGON Jésus l'a fait.

VLADIMIR Jésus ! Qu'est-ce que tu vas chercher là ! Tu ne vas tout de même pas comparer à lui. (Beckett, *En attendant Godot* : 134)

(21b) VLADIMIR What's Christ got to do with it ? You're not going to compare yourself to Christ ! (Beckett, *En attendant Godot* : 134)[16]

(22a) –Quel homme à la valise ?

Le cordonnier lui adressa un clin d'oeil qui voulait être malin.

--Vous n'allez pas jouer au plus fin avec moi, non ? Je ne lis pas les journaux, non ? Alors de quoi était-il question dans les journaux, les premiers temps ? N'est-on pas venu me demander si je n'avais pas vu Frans sortir avec une valise, ou sa femme, ou quelqu'un d'autre ? (Simenon, *L'amie de Madame Maigret* : 121-2)

(22b) 'You're not going to try any trick with me, are you ? (: 103)

つまり「異常な行為」の aller + inf.には be going to + inf.の解釈と重なりあう部分があると推定されるのである．フランス語の「異常な行為」の英訳として be going to + inf.が使われるのは be going to の価値によるのか，それとも文脈によるのかを現時点では明らかにできない．川口（2007 : 319）では Larreya(2005)が「異常な行為」の用法を近接未来の用法に結びつけた Schrott(2001)を批判したことに言及した．これは「異常な行為」用法があらゆる法・時制を許容するのに対して近接未来では現在形と半過去形しか許容されないという観察に基づいた批判であった．確かに両者を直接結びつけることには問題があるが，しかし英訳を見る限りでは両者の関係がより密接なものである可能性も排除できないのである．今後の検討課題としよう．

6. おわりに

本稿の目的は aller + inf.のモーダルな性質を未来形との関わりを通して探ることであった．未来形は時制形なのかモダリティ表現要素なのかという伝統的な問題が示唆するように，未来形にはモーダルな用法が多くある．Aller + inf.をモーダルな視点から考察する場合には未来形のモーダルな用法と比較することが有効なアプローチである．その途中で Confais が aller + inf.が客観的で，未来形が主観的な表現形式であるという考えに遭遇した．

しかし主観・客観という概念が明快な規定の対象になっていないために意見がすれ違う危険が大きい．「モーダル」とは何か？という問はとりあえずは投げかけたままにしておかざるを得ないが，概念規定は実際の言語分析によってでしか行なえない．本稿で見た諸用法のうち，未来形の持つ「緩和」用法と，aller + inf.の持つ「特徴的ふるまい」および行為を「異常」であると性格づける用法は，それぞれの表現形式に限定されているように見える．一般にaller + inf.と未来形は後者のモーダルな用法が前者に欠如することが多いと考えられがちだが，そのまま受け入れることは出来ない．並行する他の用法の検証，対照研究による概念規定の精密化などが今後の課題である．

注

* 初校の段階でSundell(2003)が本稿と類似した問題提起をしていることに気づいた．必ずしも解釈が一致しているわけではないが，参照されたい．なおLarreya(2005)とも未来形とaller + inf.の平行性について解釈がずれることがある．

1 未来形とaller + inf.について発話論に基づいて英仏対照研究を展開するCelle(1997), (2006)をしばしば参照したが，理解が及ばないことも多々ある．原典に基づいて筆者の誤りを糾されたい．

2 本稿では状態，関係，行為，出来事などのアスペクト特性に関わらず，文が言及する述定関係を「状況」と呼ぶことにする．Cf. “situation”.

3 Heine & Kuteva(2002)の掲げる文法化のソースとターゲットのリストを参照のこと．

4 Werden + inf.を未来形と認めるか，それとも法動詞と考えるのかという未解決の問題についてはConfais(1990)参照．

5 川口(2007)参照．Clédatが既にUn jour il vous fera le meilleur accueil, le lendemain il vous tournera le dosを挙げてこれをfutur virtuelと呼んで，これにil est capable de le faire, il est homme à tourner, et exprime ainsi non seulement l’avenir, mais les dispositions actuelles du personnage en questionと解説したことについて，Sten(1952 : 55)は未来のニュアンスに注目し，未来において問題の人物はその性向からみて特定の行動をすることを予測させるのだとコメントした．

6 ある条件（主体の性質，状況の特性など）が特定のふるまい（状況）

を引き起こすというLarreyaの含意関係によるモーダルな解釈は前の注で見たStenと同じ考え方で，未来形の予測prediction用法の拡張に基づくことになる．これに対してCelleはこれがすべてのメンバーを特性の成立・不成立の検証のために走査parcoursすることによって始めて得られる用法であり，(2)ではsouventがこの走査の痕跡であると考えている．ここではこれ以上述べないが，Celle(1997：110-113)はフランス語未来形で訳すことのできないwillの用例を提示して，英語とフランス語との相違を論じている．

7　しかしbe going to + inf.はこの用法を持たない．またフランス語の未来形とaller + inf.の両者が持つ用法ではあるが，その相違点は明らかではない．

8　和訳はできるだけ逐語的にするが，「だろう」を使うことが望ましい文脈にもぶつかることがある．「だろう」が未来形の訳に対応するのはごく人工的な教室での和訳以外ではまれであるが，全く除外されるわけでもなさそうである．今後の課題としたい．

9　[Le futur historique] s'emploie dans un contexte passé : il sert à évoquer des faits postérieurs au moment évoqué, en ouvrant une perspective sur les conséquences futures des événements passés. Les élèves et les étudiants en usent et en abusent [...] (*ibid.* : 313)

10　時間的断絶の概念は発話論の枠組みの外でもImbs (1960) などに見られる．Damourette & Pichon(1911-1940)の豊富な例やFranckel(1984), Confais(1990)など参照されたい．

11　Celleは未来形は時間に関して発話状況とは断絶しているが，主体のパラメターに関しては発話主体の関与が見られるので断絶してはいないと主張する．アセスメントは発話主体の発話文に対する直接の介入によるモダリティ効果であることになる．

12　このことに関してもう1つ例を挙げておこう．

L'enfance et l'adolescence d'Honoré <u>seront</u> affectées par la préférence de la mère pour Henry, lequel, dépourvu de dons et de caractère, <u>traînera</u> une existence assez misérable ; les ternes séjours qu'il <u>fera</u> dans les îles de l'océan Indien avant de mourir à Mayotte contrastent absolument avec les aventures des romanesques coureurs de mers balzaciens. Balzac <u>gardera</u> des liens étroits avec Margonne et <u>séjournera</u> souvent à Saché, où l'on le montre encore sa chambre et sa table de travail. (Berthier, ibid. : 172)

歴史的未来の多さだけでなく，traînera，とくにfiniraに見られる重要度の低さはCelleへの反論になりうるのではないだろうか．

13　Confaisは発話時点では検証できないPaulの結婚をあたかも確認され

うる，または部分的に確認されているが如くに提示するのがaller + inf.であり，例えばPaulが結婚のための用意を始めているとか，婚約者が間違いなくいるとかという状況の下で(18a)が用いられるのだとする．それに対して未来形を用いる発話者はPaulの結婚についていかなる証拠もなくただ自分の直感に頼っているだけだという．

14　これはブログから取った例だが，近年は話し言葉で頻繁に現れるとされる．川口(2007)参照．

15　「異常な行為」の例文のもつニュアンスを伝えるのに適する形態は日本語にはないので，和訳に下線を用いないことにする．

16　独訳はJesus! Was soll denn das heißen? Du willst dich doch wohl nicht mit Jesus vergleichen? (: 135)となっていて，wollenが用いられている．

【参考文献】

【テクスト】

Balzac, H. (1999), *Le Colonel Chabert*, édité par P. Berthier, avec une préface par P. Barbéris, Folio classique, Paris, Gallimard.

Beckett, S. (2003), *En attandant Godot ; Warten auf Godat*, Revidierte Übertragung von E. Tophoven, Dreisprachige Ausgabe, Frankfurt am Main, suhrkamp taschenbuch.

Favier, J. (1991), *Les grandes découvertes. D'Alexandre à Magellan*, Paris, Fayard.

Kristof, A. (1991), *Le troisième mensonge*, Paris, Collection Points, Seuil ; translated by M. Romano, *The Third Lie*, New York, Grove Press, 2003 ; übersetztung von E. Tophoven, *Die drite Lügem* Zürich, Piper Verlag, 2002.

Kristof, A. (2006), *Le grand cahier*, Points, Seuil ; translated by A. Sheridan, *The Notebook*, New York, Grove Press, 2003.

Simenon, G. (1950), *L'amie de Madame Maigret*, Paris, Presses de la cité ; translated by H. *Sebba*, *The Friend of Madame Maigret*, 2003,, Penguin Books.

【論文】

青木三郎 (1998), 現代フランス語の単純未来形の「多様性」について，『文藝言語研究　言語編』 34.

Aoki, S. & I. Tamba (2000), Avenir, anticipation et catégorie linguistique du futur, *Scolia* 12.

Carter, R. & M. McCarthy (2006), *Cambridge Grammar of English. A Comprehensive Guide. Spoken and Written English Grammar and Usage*, Cambridge, Cambridge University Press.

Celle, A. (1997), *Etude contrastive du futur français et de ses réalisations en anglais*, Paris, Ophrys.

Celle, A. (2006), *Temps et modalité. L'anglais, le français et l'allemand en contraste*, Bern, Peter Lang.

Chuquet, H. (1994), *Le présent de narration en anglais et en français*, Paris, Ophrys.

Confais, J.-P. (1990), *Temps mode aspect. Les approches des morphèmes verbaux et leurs problèmes à l'exemple du français et de l'allemand*, Toulouse, Presses universitaire du Mirail.

Coates, J. (1983), *The Semantics of the Modal Auxiliaries*, London, Croom Helm.

Damourette, J. et E. Pichon (1911-1940), *Des mots à la pensée : essai de grammaire de la langue française*, Tome V, Paris, D'Artrey.

Franckel, J.-J. (1984), Futur 'simple' et futur 'proche', *Le français dans le monde*, 23.

Heine, B. & T. Kuteva (2002), *World Lexicon of Grammaticalization*, Cambridge, Cambridge University Press.

川口順二 (2007), モダリティ動詞 aller, 『藝文研究』 91-3.

Imbs, P. (1968), *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Paris, Klincksieck.

Larreya, P. (2005), Sur les emplois de la périphrase *aller* + infinitif, in Bat-Zeev Shyldkrot & Le Querler (eds.), *Les périphrases verbales* ; Amsterdam, John Benjamins Publ. Co.

Marshall, G. R. (1999), Pas d'avenir pour le futur ? A propos du futur allemand, in *La modalité sous tous ses aspects*, Cahiers Chronos 4.

Riegel, M. et al. (1994), *Grammaire méthodique du français*, Paris, P.U.F.

Simonin, J. (1984), Les repérages énonciatifs dans les textes de presse, in A. Grésillon & J.L. Lebrave (éds.), *La langue au ras du texte*, Lille, Presses universitaires de Lille.

Sten, H. (1952), *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Copenhague.

Sundell, L. -G. (2003), Le futur modal revisité, in M. Birkelund et al. (éds), *Aspects de la Modalité*, Tübingen, Max Niemeyer Verlag.